

色蕉翁及古文

上

中村俊定文庫
文庫 18
997
1



山形縣飽海郡遊佐町

醫 堀 文 悦

芭蕉淡花屋實記序

今ハ一むし此ハ花舎某ノ後廳ハ芭蕉翁終焉ノ
地ナリ時々つゝあきハ木ハさちけをさめ空をまよふ皇
うはさぬれハ石ハ沉みぬ人あゝぬりゆぬ元亨釋書
曰人々境留境者也誠なるに此言漆川ハ史
録ニ楠正成ノ戦死を聞み歯を喰ひて涙を墮
さし族ハ忠義をさしぬ人ハ繁花屋ノ後廳芭
蕉翁ハ終焉ノ實記をさしめ決す衆洞を拭きさ
葎ハ世々月夜とあゝぬ人々衆カノ秋回跡をさ
此日記ハあゝる傳りたるをさしめ風雅ノ冥合

やいふ心是むくよま来先生は馬寮くく翁生
 涯の事実を書記しおきしゆかきしをく
 蒼と車ハあしきくく浪速河みく
 草枕松島村河須大明石身ハ風雨れ行方き
 多々漂泊二十年此曉れ夢さしあてり
 面影れくくくく年終れ後くくく
 今風花雪月くくく公卿を慕くくく此不
 可思議な縁三生値遇れ因縁と感仰ま人

文化七秋八月五日 東肥七隠文曉識

翁五上



翁五故上 花屋日記

肥後八代 僧文曉著

浪速 花屋菴奇淵校

松風の勢よく
 けしんらぬ
 九月廿五日

九月廿五日 泥定、案内くく清水浮洲の茶店、
 橋柱一筋も茶店のまゝ需々短尺杯まぐ打具、
 けしんらぬ

所思

此道やゆく人形ま杖のくれ 翁
 焼れ畠の木くかは葛 泥定

毎文九月廿五日
 御座る事にて
 花屋のまじり
 行一
 けしんらぬ
 色蕉油まじり

昔十人より短く由る奇伝一抄とて止む今度ハ
志好ひあり西國へと思ひこころ移ししと何となく
のこししと世れをうぬさうおりのつとあつと
あつとや此のよつとあつとひうと推然とあつと
しとあつとひけり

旅懐

此社を何となくとて伝書と書 翁

迷玄とていふる一奇の事とて人々同世
れ地よりし其物より思念より自矢せし人

の如く書とるれ又文字古今未嘗有なり

惟然記

廿六日園女亭に山海社社味とりて登座の婦人
ありて禮とて敬座は法とて其貞潔閑雅の婦
人ありて其ハ侍轉松坂此人とて風雅ハ何れとて字ハ
きりて其字をあらはに因西惟中とて侍あり浪華と
のありて時惟中とて妻とて其字をあらはに風雅の名使
とて高とて惟中とて死後江戸よりとて其角と
て人との事

白葉の目とてあつと見侍座は

五葉あまを流と船力 園女

まに九人哥仙りり別記

惟然記

廿九日芝柏亭に一集をてき約儀なりし日
お續より重食し終りゆきつりりく出席は
昔白地くは

林ありま隣ハまふ人七翁

此夜より胸腹痛は奇味をゆき酒は入り
私常は酒をんとゆきゆき茶店に胃茶湯を續
きゆきゆきと験をく晦日朔日二日と押移り

に度敷きく終りかは愁をいりけり惟然支考
内議していりる良醫かとも折きゆりんと申けき
師曰我本元老弱なりゆゆぬ醫をいせゆりゆ業
方いりりん我世の本節をてあるものなり終り
本節ををゆきゆき見せゆりん去来も一回はゆり
法をいりりもあんな早く消息をおくるいりり
まよりあ人消息ををゆきゆき京大津へはゆりり
あゆりり之道も専に狭くゆゆ外は同所もゆき
人敷入るゆきゆき保養を抱もゆきゆき其所
此所とあゆりりりりわねる人ありゆきゆき堂前南久

大島所花全仁たつと老の裏を去ると借り交けり
 間も較ありく厚まう物較奇より奇藤より法事
 猪子と信し其夜とくよ清少抱せりしあ花を
 移りしひり此時十月之日也

次良兵衛記

四日車庸畦止凱升舎羅何中某八師の病
 氣とありく之道再よりつたりしと学つたりし事
 之道より同侍りしあ花をよすある

病氣云々 又つて同尋人きりし度おに
 とわら胃袋と張紙をしり且仁左のよりし事

次良兵衛記

和帳 府内入用品請取覺共
 府内安付し道具品等

次良兵衛記

戊十月四日

- 一 机一脚
- 一 烟草盆二口 火入
灰吹とす
- 一 夜具五流 夜具箱
四具本綿
- 一 膳十人前 椀箸口四添
- 一 釜鍋 一口
三口
- 一 茶瓶掛 二口
- 一 茶碗 十
- 一 硯一面 墨一挺
水入小刀
- 一 帚二本
- 一 枕 五ツ
- 一 竈 三口
- 一 火箸 三
- 一 火鉢 二口
火箸法
真瑜
- 一 茶碗鉢 三口



一薄刃庖丁	三本	一茶罐	一コ
一藥鍋	ニツ	一研水	一本
一摺鉢	一口	一炭斗	一ツ
一水囊	一ツ	一油德利	一ツ
一鹽	ニ口	一手水鹽	ニ口
一行燈	ニ張	一縣行燈	ニ張
一挑灯	ニ張 <small>小大</small>		
一白米	一斗	一味噌	三升
一醬油	一升	一薪	拾束

一口	炭	一俵	一口	油	一升
一口	紙	一束	一口	雜紙	一束
一口	塩	一升			

右 仁右多しり中取書を置
 三歩二米 相渡
 一 座敷科

我師便中幸、老師一此、我より少、
 寧、幸より、起居不穩、之通、不、
 以故、口不自由、多、存、計、口、堂、南、冬、

所於全仁厚の重方を壽果極よる条
借文之道謹刺る先寓居の定りて今別
別と以て分る心元以て極解るも醫者味も
以て早く本節の以て極解るも醫者味も
此節の条別本節の別解るも此條は
貴雅の條早くと下り相待り本節の
以て極解るも醫者味も

十月二日

惟然
支考

支考

初く別家をも本節の以て極解るも

今朝と夜相違りて存る老師の事昨朝
泄瀉の意味を賦一室夜中二十餘度
通ずるは江村園女亭も蘭の以て過念
故に相考の一紙の中、掌を返す如く今
朝の支考又通し刺度數三十餘度賦始
之道をもと極解るも此條は
同條をも急と下り相待り南之方所於全
仁厚の壽果早くと入るも

十月二十夜子ノ時

惟然

去来快

ねくたはけくねく外何事もあらず
下り本落しあふくあけかたは
くき花折あふく幸羅漢寺く中子信賢
越々く羽衣折あふくあふくあふく
幸原もくくあふくあふく

三日廿七行但留宿して幸原寺に宿す
心二日朝々快くあふくあふくあふく

翁吉上 八

中へ己の時ありし夫らと私と軒あはれ
い交の時ありしとあふくあふくあふく
娘とあふくあふくあふくあふく
國に因一人のあふくあふくあふく
わきあふくあふくあふくあふく
対文あふくあふくあふくあふく
日れあふくあふくあふくあふく
某あふくあふくあふくあふく
にあふくあふくあふくあふく
去来もあふくあふくあふくあふく

いふにわが心はさかたに其意もつゝもつゝにわが心は
意は清きこと多し半生と入るるも忘却不仕と
ぬけりれ洞子むやぬに類當茶に効驗をりし中
とくま來又消息をとくも多し飛舟便る本節
よつゝいふ

支考記

曰くわが杖子の時返つゝいふ本節ありて二日出の
有人れ消息を多し親るが故大はと丑の時よと
一番舟よ來りしと短日の冬一途名諸子よと親も
そつゝいふ多しむは極群を伺ひ心脈と膝と

方逆逸湯と調合

支考記

曰く朝本節中さかたに朝解人參半兩道修
所体見重しむる同く包みふた袋を多し親る之道
方よと世話しむ洗濯老女とわし師れは衣若其
外まは衣若ととく園女とわし菓子并水仙と
送る支考惟然外抱次正吾湯中も多しゆの之道
心もつゝいふ多し舎羅吞舟とりの来る接摩やや
子も今日二十度余とわしと夜ととく重なる後重
あつ

次良長清記

五日朝丈草乙別正秀さうはてゝ氣帯る多々各
志し時作のゆゑや師付し思定の氣けり朝迄
之清くはる清系置こゆふ夜者蒲団又く五流
茶を汁 留油二升塩を升味噌之升薪二
十束炭二十束目煎家こ束より今日師食した
るは湯素麵二箸より夜中たゞあゝ五十度
におよ

次良長清記

六日て氣陰晴さすは朝の食入新之箸茶扱

終宵寐入きもは暫く睡眠したるは目さ
ゆるを茶をちくめしあ先は野の方を
垂けりし大井川は吟行せし

大堰川波よりけり夏月の翁

此句のより系又さすはと大井川は夏會しは
かまへきりとおひわたり清瀧

清瀧や波よりけり青松葉 翁

を作し事柄をさすはと同業なり人の
もいふは大の川の白の捨とくんと汝の中きり
あうるは須日園女は極

白菊は目よたてては塵ほく 翁

雪吟一あり是又回葉の似ありは道節あり
そは故おれ二句と一向は接するも白菊は句を結
しおまゆんとおりの汝う急いんま来洞とく
名匠はく名匠惜と道と重したより有るは終
句一章よまゆんも千辛万苦しるも清病腦の
中は清骨折風雅は深悟しるもとけき眼ある
りの何者も此句を回葉回葉とるんき恐まう此
句を回葉回葉はくしりのひき眼人しるのあり
其の中は此句の系情別は保るも句意をなほ

対も二句やも別ありかありゆあり裁い句は意
を同じえんも句は姿をなほ青苔日厚自無
塵よまゆんも隠者れ高儀をなほ語今六園
女ういやくもあまも陌上柔れ凋あるとわたり
ゆりも吟ありまも妙なり語も妙なり世人は句
をなほりの園う清節をなほん波よ蒼るは語と
左大仲う必非絲與竹山水有清音とる絶
唱もおりまも園う二支よまゆんも貞潔や大井
清籠れ絶景と二句は留わゆるのあ感しても
らありあるまもあまも師も撰題まもおんゆり

去来記

七の初より不お名は眼氣の目もつてありぬ
 方逆逸湯に加減し入野を好くし人園女を尺
 舞くも菓子等贈りては次第に取計く之
 道に贈る鬼貫ある去来應むりぬ選り園
 女可中涓川ありす其末ま考會新と終自業と
 めり終日曇る夜より雨晴る夜より雨人音
 もあつたひびきに灯けり人加へるわつとけき
 かし別正秀ホ去来の中けり今度師り泉下
 けりおとすてしるし此は風特いふなるは見え

去来然しあ居きをりも春もよき事ふがはし
 申名二日後消息届ぬとてさふりきり人
 もおのひもよやあふ今秋閑静なり今これ
 難よおひもまはは波復おひもり減はれ祝儀を
 せしよまうんとあ静に枕上の句ひもあ機
 嫌とていひの中けり物次第に清くあふお
 ろもあつきたるひあものさるは儀代に變化する
 まうもあまも真行草に三つともあはれを
 ろるも千変萬化すあひもは響とあふ
 汝も此の境にも地をもかき事まも地ふんを

杜子美、老とおのひさひの西上人、れ道心とてたひ
調へ業平、高儀とてつゝつゝも我お母あり
とおのひさひ、他は化やとて事おの言ひし事
らまゝも息いこゝろも心と喘ひし事いひたひ、香
舟清とて潤とて又薬とてわくせもあつたまよ
各筆とてうめあつて書く

惟然記

八日、雨映晴、清不食、うり京は、士ある信徳
とて路息り、清病辭を伺ひ、回近に、れ角とて
使來、侍人の傍に、は間とて、今度、れ清、而、勞平復と

祈を、きん、とて、住吉大明神、連中、とて、人を、ま
へ、とて、去來中、おと、ま、い、ま、各、あ、う、と、と、之、通、次、郎
とて、清、ハ、電、音、とて、社、務、林、桑、女、方、とて、祝、詞、とて、た、り、
厚、く、納、め、お、く、とて、各、録

奉納

落つ、さ、や、とて、水、とて、神、あ、つ、光、本、節
初、雪、とて、や、とて、い、ひ、心、佐、老、とて、正、秀
味、とて、鴨、とて、さ、ま、り、や、誌、とて、い、文、草
起、とて、声、とて、ま、り、とて、湯、婆、とて、支、考
多、仙、や、使、とて、ま、り、とて、舟、とて、香、舟

居りてきくしきみつふも家原のや 伽香
けかりの竹れをわしやとさかい 惟然
神はるはくこのうらや松は風 之道
日よかきあはるの顔より 霜の菊 乙州
あうしけさるやほや鶴はあま 去来
大勢は集會するはきくしきみとて師を慰め
申しと本節をすまし申しと今朝は肺と約ん中
に次第に氣力も衰ゆるも多脈神より
最初は食滞より起りし泄瀉もきくしきみ根元脾胃腎
れ者より大者は痢疾より故に逆逸湯を方

まり程又加減しきみと書はしきと薬力やく
くを酌する治法を他醫よりせんおりの本
師よりし師曰本節の中条をきくしきみの仙方
けりく虎口龍鱗を醫はしきと天業いんをん我
かく悟道しはきく我呼吸はきくしきみの
本節の神をを服し他を求むるしきみの
けふ風流道徳人之れ同然とすしきみの
支考乙州等去来は何きくしきみの古本を
多病床に撰姪とすしきみの古本を
鳴名は宗師多く大朝は辞母をきくしきみの名匠

此辭世にまゝにやと世のつものもつて一あるを
一句を誦したるに諸門人其望はぬへし師は之
をけの言ふにけし此辭世今日此言ふにあり此辭
世我生涯を捨てて一句とてあはれ辭世ありとて
於し若我辭世のつものと同くある此年頃とい
捨おき一句のつものも辭世ありとてけし
諸法從來常示寂滅相あり是釋尊此辭
世のつもの一代に佛教此二句の外にあり古地を
捨てし世あり音此句を我一風を與せしを初て
辭世あり其後百千此句を吐て此言ありとてけし

あはれにけし句を辭世ありとてけし
と次言ふ清く傳へしを詞のよきとてけし
の語ありとて此語實に玄く微妙なれば凡人を
らんとてけし

支考記

おののつもの言ふ此野のありしを捨て贈る事
消息その今日もて伊賀の音信ありとてけし
中法に能く飛揚を著しつものつもの沙の中けし
師は之我遠道にありとてけし弱る身の教百
里の飛杖ありとて親族とてありとてけし

せし我過より今大病を おろろく一類中此さ
りて時よまを此に守りあしむ思ひたし今度
大切におもひも汝はあまうとのまひける師に
急に涼きあゝ各感念の度敷く十夜におよ

惟然記

九月諸子に取らるしあまうの夜に松果
白く此垢つらざる不淨あるを脱るしよき衣を
久しうせ中師曰我道地波濤にほるの草を
安藤塊と枕し多終とやえと身にかる美く
しに禪に人よまも未來ましくは友とらうた

しく鬼録とらるむと受生に本望より本草七来
と召昨夜目れあはるましく不計素入多吞舟に
半せきり各録したる

旅病多し著ハ枯野とかけ山家

枯野とめくるま心も一枯るのつらさる人よあま
辞せよあし辞せよつらさる人もあし病中
けはる繁候く保生に於一大事をあま
たうつらま生涯好く一風流と云わ
是も妄執に一つもつらへけん今ハあま
云たよあし月々朝雲暮雨は男も地は山水

錦鳥けし急もさあつたらん心身風雅さう
さうさうかゝる河魚け患よつと進ひさう今
とけるさうに其風神け名章を唱へ給ふ事
法門繁れさうい他門け同と未代け龜鑑さう
少波さう糸洞を温め眼あさりの是とさう魂
飛さじ耳つらりの是とさうは毛髪さうさう
動さじ列坐せ而く感慨悲想さう悔絶さう
多齋さう是師翁一代遺教経さう此日さう
けさう地後人さう人さう度救らねば

去來記

十日初時自せを師おめさうさうを度救志まじ
ひさう不眠さうまう人さうおめさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう此日芍薬湯さうさう諸子
おさうさう食事さうさうさうさうさうさうさうさう
梨安さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
にさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
味さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
期さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
つきたさうさうさうさうさうさうさうさうさう

惟然記

十百期さうく時雨の野りしうもれく東武は其
角さうは是ハ東武は誰彼同伴しうもれく東武は其
序和為紀州と打ちうる泉のうるは毒の打入り
しうはうるは師は骨をうるは毒の打入り
とたつてはうるは漸にうるはつけきうるは毒の打入り
わくは骨連立しうるは毒の打入り
愁ひ目もはうるは師もはうるは毒の打入り
唯く洞きうるは其角もはうるは毒の打入り
ありしを文章を来支考其外は尻次は問り
振さし病性も始終をわくは此夜をうるは毒の打入り

あおのしうるは毒の打入り
しうるは師もはうるは毒の打入り
娘はうるは毒の打入り
すしうるは毒の打入り
と来は食事もなりお徳に跡をたうるは毒の打入り
つしうるは毒の打入り

病中はうるは毒の打入り
去来は毒の打入り
毒沙を毒の打入り
よ白毒をうるは毒の打入り

此浦園とていつらあ被るゝかきんりる
 のもあつては夜森しゝかきんりる夜

ひしりる浦園とていつらあ被るゝかきんりる 惟也

おしりる木ゆもたゝる籠 正秀

一生とていつらあ被るゝかきんりる
 しりる人ゝ娘ゝかきんりる十日とていつらあ被るゝかきんりる
和歌集の
四行上は會の
うまひに
 けり初ゝいつらあ被るゝかきんりる日
 こゝは 擁れあむ日南と群ゝいつらあ被るゝかきんりる
 掲とゝいつらあ被るゝかきんりる暫くいつらあ被るゝかきんりる

いりりひけさゝ大病中けゝるか忽倦とてひ
 りる入ゝ支考ハ師れ散白と滅はゝ一集
 せん心歎あさゝけゝるれ病苦と脱たゝりり
 あさわゝりゝ今日機始ゝ中出結ん
 と去君と申たゝひまゝ去来ゝ師れ中を
 師ハ平生名聞らゝきゝ新を以今日漸快
 將とて結るゝ法入娘ゝおろし中を
 師ハ平生名聞らゝきゝ新を以今日漸快
 將とて結るゝ法入娘ゝおろし中を
 師ハ平生名聞らゝきゝ新を以今日漸快

昔人と書りつゝ、よはは同よほまはけの支考
 とうふひのいひおしき法子けあ糸面目とうふ
 印の行々惟然と打ひし我よ白りりきま後人
 としひき

とうふはあはれあはれにきり 支考
 きまら支考あはれあはれ師もかは支考ひくおひり
 後ひけり



これ二羽鷹の
 乙州の枯尾を
 菜飯として
 支考の夜ゆ
 支考の支考
 支考の支考

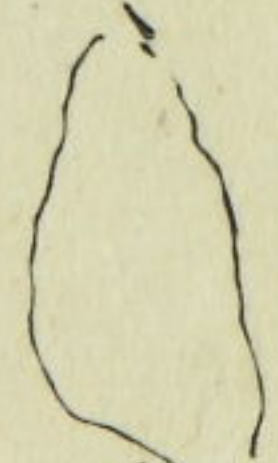
本草 二十

吹井とて鶴とまひ心初くま 其角
 一々惟然と書りしはあは師支草と白と今一度と
 のうと後ひきあ支草あはれあはれにきり
 洞あは面白くあはれあはれあはれあはれ
 ありいつかあはれあはれあはれあはれあはれ
 節一人熱といひあはれあはれあはれあはれ
 本節ら病除中けあはれあはれあはれあはれ
 ちあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ちあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ちあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ちあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

△

又云れ、こゝろもい、暫く、回乱、一人も又、
いふ、きり、や、り、つ、く、又、実証、は、なり、た、し、左、右、
舎、羅、吞、舟、う、ら、り、を、い、次、あ、ら、流、り、と、い、う、を、
介、抱、し、寝、ま、く、ね、め、け、き、八、十、二、日、あり、兼、く、用、籠、
了、行、り、う、へ、き、を、れ、薄、子、も、襖、も、や、り、と、い、う、を、其、角、
を、け、ぬ、丈、草、を、是、へ、と、い、う、向、ま、を、給、ひ、穢、を、と、い、
と、咫、尺、を、い、う、を、い、う、り、行、水、を、造、ら、た、い、本、節、
頻、り、割、し、け、き、を、と、い、う、の、を、み、給、ひ、ゆ、い、や、も、
く、と、い、ひ、湯、を、い、を、る、わ、せ、け、を、府、を、と、い、う、
う、う、あ、本、草、の、醫、術、を、と、い、う、り、ま、る、と、い、う、

前巻上世六

又、謝、し、給、ひ、叔、之、人、其、品、を、送、く、め、さ、ま、こ、州、正、秀、
を、左、右、う、一、支、考、惟、然、と、昔、と、い、う、を、と、い、う、り、
あ、り、く、と、送、き、う、た、い、病、苦、と、い、う、も、い、う、た、ら、
人、の、奇、異、れ、お、り、し、と、い、う、け、り、伊、賀、れ、送、と、い、う、
う、と、認、り、し、う、い、外、と、京、江、戸、美、濃、尾、張、り、い、う、換、
に、送、き、し、と、い、う、た、い、始、終、の、人、才、と、い、う、を、記、
と、い、う、中、に、あ、り、ゆ、を、痔、喘、と、い、う、
と、い、う、
次、高、く、湯、を、い、う、を、調、う、か、わ、せ、け、ら、や、者、
あ、り、た、い、ゆ、い、う、い、く、い、う、永、河、周、梨、を、踏、
通、う、の、と、作、ら、せ、る、石、汝、う、丈、草、乙、州、あ、り、送、給、し、

清見の霜と云はれ侍りていふことありしに
 多し雪井に余あり侍りぬ彼の数年は薪
 水は常勢ありわたりぬ我多たぬふおとそり
 足持しとらぬ風流交りたりたのてをさへ
 諸國のことはいふに難きかゝるに終りたりしに余
 言ふ一合掌たりし歡音經とていふ事ありしに
 言ふとぬれし事もききし事ありしに刻過りて埋火はあり
 たなりしにいふことありて次は清く抱きし事ありしに
 事ありしにいふ事ありしに刻過りて埋火はあり
 終りし属曠よりきし事ありしに元禄七甲戌十月

翁重正 廿七

十二日申に中刻法年五十一歳あり
 昂刻不淨と法あり白木に長櫃を納りてをす物
 ありし川舟より伏見よりいへりし事ありしに
 其角吉来丈草已別正亦木甚惟然支考
 之道吞舟は兵衛以上十一人花至仁左衛門
 京へ荷物を送りし時長櫃はありたをす
 たりし念佛誦經ありしに付養ありしに八幡法あり
 頃夜もありしに西よりききしに僧李由れりたり
 甚しき事ありしに逢はれしに事ありしに移りたりしに
 ありしにありしに経ありしに京橋にけりしに根あり

通つよかりと急ぎまゝにわさし十二日己未時
よき大はれし州を駕入まるとつらりいかにし州に伏
見しと先まゝのつらまゝのつらまゝを掃除しきま
めは俗に用意と申は深の之道吞舟治りまゝ
心髪れ延ひきまゝ六月代入大草法師のま
けは清法衣淨衣等、智月とし州を妻總を
淨衣白衣まゝのまゝとへき答まゝと、約を
いふのまゝとわ兼く茶色に衣装しつらまゝをす
へまゝのまゝとるまゝにけは智月尼れまゝとて淨
衣も茶色に服まゝとせまゝに送は華八十四

公願書上 廿八

目と定つて彼は口及まかろふにけり

大坂若念うるに支考惟然るるに仕出れは羅羅
寺に僧伊勢の急用まゝとまゝとを花をまゝと
せしまゝは是幸しと頼つらうにけりまゝ此僧宗良と名する
目しと漸疾まゝ歩行まゝのれやむとをゆと宗
良の滞るまゝ故する朝伊賀と野まゝ行人のり
同つまゝのたれれを仕出り此依十二日己未
のころよと野まゝのよけり士芳卓感しつらまゝ
と大に強まゝとまゝ物もつらあまゝの松尾氏まゝあり

はくさくしげ

土草物語
年袋

十二日暮りて休んを毎一たし臥高昌房控芝
北玄曲翠等いそね何まうまの行違ひしを
らむおゆく大坂の忌あはたふよとてさるる法
子清殿をもちたまふまめはるる流ひぬとあつら
ち又又十二日此昼船の大坂へ引入るをね
け刻より一まつくねま頭より大けのつゆ

昌房物語

義仲寺真愚上人任職の六道守師より三井寺

命書上三十一

常任院より申子三人あはれ讀經念佛あり法
入櫃に其夜雨に刻より諸門人通ねしを伊賀
れ一たをもち付ねるはあも左右の寺其角
乙州等評議しあはて式しよく十四日此雨上刻
と相親む昼おちちるを集れり人いそあはれ
恨こひえさ人ぬ凡三百人餘あはれあは御
りあはる老若男女あはれあはれあはれあはれ
れあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
水の面をかやき渡り急ぐ栗津はあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

露へてあるもののこころもあつたもあつた何の心もあつた
ものもあつたもあつた矢橋は健たつたもあつたもあつた熱人け
あつたもあつた胸もあつたもあつた洞とほつた

支考記

引導香語

雪月魁魁風花精神等因一句驚
動人天嗚呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉
萬里白雲一輪明月五十一年一
字不説

霜雪上世

各捨香

支單	其角	去來	李由	曲翠	正秀
本蘇	乙州	臥高	惟然	昌房	探芝
泥足	之道	芝栢	北玄	尚白	土坊
卓袋	許六	丹野	風國	野童	遊力
野明	角上	胡故	蘓葉	靈椿	素聲
回鳥	萬里	識々	這萃	荒雀	楚江
木枝	扑攻	真光	支考		

諸國代香不記

右の如近江中八中一及之と京大坂美濃

尾張伊勢より出くし京よりみちを
諸國此人の二世値遇せ給と云はるし我もく
や香も向をふ其教何百人といふ教も此境
同獲けまふ表し入る人をも裏へめあつちうに
あつし並田に別路なる事社を焼香人々
をさふ多裏へめあつちうして證しきまぬれ
く葬埋をりけふ子に時さあつちういふあつちう
遺令は通日本曾殿にたのうに埋葬しなり
けり

十六日ち来其角らも膳所大付の人々類を

永正吉上廿二

諸よりあつちうめあつちう卵塔をこころ事
と塚けらうらふ年あつちう柳つらとらけり
法名は形名とあつちう色直を一本兼くこれ
ゆひと茶は本の今を茶とあつちう茶とあつちう
梅とあつちう梅田いふらとあつちう梅とあつちう
日れりと廣とあつちうと生前とあつちう名豊女尊とあつちう
浪とあつちう其徳美若れ絶頂とあつちう人丸赤人
れりといふとあつちうあつちう代は今とあつちうあつちう我若
一人あつちうと

此一轴再取存什物

多法 雪芝夏
筆公 皆獲
主考 檢維
十月 半殘
生息 土芳

清史之... 既殊... 一思... 如... 換
... 又... 後... 永... 年... 以... 可... 以... 靜
... 臨... 終... 之... 物... 也... 一... 年... 子... 居... 序
... 市... 諸... 以... 及... 主... 考... 左... 初... 所... 以... 時
... 在... 於... 中... 也... 十... 乃... 反... 出... 及... 右... 也... 也
... 大... 乃... 也... 乃... 一... 乃... 也...

十月廿
松香
立

松尾中...

新藏...

公同反故上 畢

Small handwritten marks and characters at the bottom left of the page.

